

[テーマ企画：特集 受動表現]

まえがき

風間 伸次郎

1. 企画に至った経緯

『語学研究所論集』では、今回「受動表現」という統一テーマを組んで、各言語における受動表現をめぐる状況を報告していただくということになった（この経緯については編集後記も参照されたい）。成田、風間、川村が「世話役」となって、この3名で呼びかけ、寄稿のお願い、原稿集め、若干の編集などを行うことになった。

まず、日本語による10ほどの例文からなるアンケートを作成し、これに答えていただくことによって、各言語のデータを収集することにした。アンケートの構成や意図については、次の2節で説明する。アンケート本体は本稿稿末に付録として添付したので参照されたい。

アンケートを御覧いただけるとわかるが、データの提供だけでなく、さらにその言語の受動に関する諸情報について書いていただける場合には、特集の中に含めるものの、同時にこれを独立した論文もしくは研究ノートとして位置づけることとした。

こうして2本の論文、4本の研究ノート、15の言語に関する受動表現のデータが集まった（論文・研究ノートと言語データが別個に得られた言語が2つある（イタリア語とビルマ語）ので、異なり言語数は19である）。イタリア語の論文において取り扱われた与格表現は、それ自体が受動表現ではないが、日本語の受身表現に意味的に相当するこの表現を取り上げた論考も、本特集に含まれるとみなし、これを収録した。最終的に対象となった言語は、外大にある26の専攻語のうちの18言語にツングース諸語を加えたものとなっている。日本語は、現代日本語でなく、古代日本語であることも注目に値する点である。問題点もあるだろうが、(1)統一した例文（意味）に対する各言語の表現を知ることができる、(2)狭い意味での「受動表現」のみならず、受動的意味を示す諸形式や諸表現について、またそれらの相互関係について、さまざまな言語における状況を知ることができる、などの点では意義のある成果となったのではないかと考えている。ただ今回の特集では、筆者の時間や能力の問題から、得られたデータについて十分な検討や考察を行って、対照的もしくは類型論的な分析を示すまでには至らなかった。今後の第2回以降の企画特集ではこうした点を改善してゆきた

いと考えている。

2. アンケートについて

英語との対照などからもわかるように、日本語の受動形式 -(r)are による受動文にさまざまな下位タイプがあることはよく知られている。その分類には諸説あるが、最近の日本語学でよく知られているものには、直接受身、間接受身、さらにいわゆる「持ち主の受身」、の3つに分類するものがある（三者が同レベルのものなのか、「持ち主の受身」をどう位置づけるか、などの難しい問題があるが、ここではこれ以上その問題には立ち入らないことにする）。他方、伝統的な国語学の分類では、次のようなタイプを別扱いにする考え方がある。すなわち、英語などでは一般的であって近代以降日本語にも定着しつつあるものの、日本語にとってあまり本来的なものとは考えられない非情物主語の受動文である。

大きな流れとしては、この2つの観点から分類される日本語の受動文の諸相を、それぞれの典型と思われる例文を用いて作成したのが今回のアンケートである。日本語では受動形式が他言語に比べてかなり広い範囲の表現を担当しているのだとすれば、他の言語においていくつかの文は受動を用いて表現することができず、単なる能動文か、もしくは何らかの代替的機能を果たす表現によって表現されることが予想される。さまざまな言語においてその「受動的意味」を表現する「ストラテジー」はどのようになっているのだろうか、それが今回の企画の関心の出発点であるといえる。ただし他方で、日本語では受動を用いないのに、他の言語では受動を用いて表現するような場合もまた存在するだろう（したがって先の記述は、受動形式（あるいはそれに相当する形式）が担当する範囲が日本語と他言語で異なる、と言った方が正確である）。今回のアンケートでは、このようなものを掬い上げることができない、という問題点があることに注意しておかなければならない（多少のコメントは得られた場合もあるが）。

さらに、上記以外にも筆者の知らないものを含めて受動文に関する分類は多く存在するだろうし、受動を専門に研究されている方にとっては、今回のアンケートを不十分なものと感じられる方も多と思われる。そうした点に関してはぜひ御指摘いただければ幸いである。

以下では、アンケートの具体的な項目について若干の具体的な説明を加える。なおこのアンケートは風間がおおまかな素案を作成し、成田、川村の両名がこれに種々の改善を加えて構成したものである。

(7) A は B に叩かれた (直接受身)

これは直接受身であり、ふつう典型的なタイプの受動文の一つであると考えられている。しかし言語によっては、受動およびそれに類する構文で、能動文での動作主の出現が許されないものもあり(フィンランド語など)、典型的といえるかどうかについてはなお考えていく必要があるだろう。

(i) A は B に足を踏まれた (持ち主の受身, 体の部分)

(ウ) A は B に財布を盗まれた (持ち主の受身, 持ち物)

(i), (ウ)はともに「持ち主の受身」であるが、直接の動作対象が体の部分であるか、持ち物であるか、が異なっている。この動作の対象は、さらに譲渡可能性の段階に応じて、さまざまなものを設定することが可能であり、「持ち主の受身」に特化した研究ならば当然それを目指すべきものであろう。今回はより広い目的の研究であるため、この2つに絞った。(ウ)では「AはBに盗まれた」という文が(意味を変えずには)成立しないのに対し、(i)では「AはBに踏まれた」が成立する。すなわち(i)のほうがより直接受身に近い性質を持っているといえる。実際に(i)は日本語と同じようなくみの受動構文が成立するのに対し、(ウ)では成立しない、という言語が存在する(朝鮮語、モンゴル語など、ただし本特集のマレーシア語の項も参照されたい)。

(エ) 昨日の夜、私は赤ん坊に泣かれた。それでちっとも眠れなかった (自動詞からの間接受身)

(エ)は自動詞からの受動である。これは次の「3.1. 受動の定義について」で考察するように、通言語的には受動のプロトタイプから大きく逸脱するものと考えられる。本来動詞にとって必須の項でない名詞をわざわざ項を増やしてまで取り込んで表現する理由には、次の2つのことを考えることができる。すなわち、①受動文で新たに主語に据えられた名詞と元の能動文の動作主の名詞の間になんらかの強い意味関係(典型的には「影響」、「迷惑」など)が生じている、②前後の文もしくは節と主語を統一する必要がある、の2点である。

(オ) 新しいビルが(Aによって)建てられた。(モノ主語受身, 一回的)

日本語では元来すわりの悪いタイプの文であるが、英語などでは一般的である。特に結果のアスペクトや過去のテンスと深いかかわりを持ち、話者の関心が、動作主から対象物(およびそれにおける行為の実現)へと移っているタイプの文である。過去

時制においてのみ能格構文が現れる言語が多いのもこの関心の移行が大いに働いているものと思われる。

日本語においては、モノが主語で、「迷惑」等の意味が感じられないため、本来的な受身文ではないと言われてきた。日本語においてすわりの悪い原因については、自動詞／他動詞の対立、意志動詞／無意志動詞の対立、有情物と非情物の取り扱いの違いなど、日本語という言語の体系全体の特性の中で考え直していく必要があるように思われる。

「建てる」という動詞にも特性があり、すでにある対象物 (affected object) に働きかける行為ではなく、この行為の結果、対象物 (effected object) が出現するタイプの動詞である。日本語では受動文において動作主がとる格に特徴が現れる(「～に」ではなく「～によって」が現れる)。格をもつ言語の場合には、ここにどのような格が現れるかも注目すべき点であろう。

(カ) カナダではフランス語がはなされている。(モノ主語受身、恒常的。動作主が問題にならない場合)

元の能動文の動作主が全く不特定なタイプの文である。受動が非人称や不定人称と深く関わりをもつ言語では、まさしくそうした受動の形式が用いられるだろう。3人称複数主語の能動文で表現する言語も、インド・ヨーロッパ語族の言語をはじめ、多く存在することが予想される。

(キ) 財布が(Aに)盗まれた(モノ主語受身、モノ主語の背後に被影響者が想定される)

直接受身だが、モノ主語で、しかもそのモノ主語の所有者など、影響を受ける人物が想定される場合である。(ウ)の間接受身の例文では通常受動構文が不可能な言語でも、こちらの直接受身の文は成立するケースが考えられる。したがって(ウ)との対比の観点からもデータの必要な例文だろう。成立した場合、表面上に現れていない被影響者の問題は各言語においてどのように表現される(もしくは表現されない)だろうか。

(ク) 壁に絵が掛けられている(モノ主語受身、結果状態の叙述)

モノ主語の受動文が日本語では成立しにくいことは先に触れたが、このように結果状態の場合には古くから用いられていることが指摘されている。これもこのタイプの典型的な例文であるが、他言語でどのように表現されるかが注目される。

(ク) AはBに／から愛されている。(感情述語の受身、特に動作主のマーカ―に注目)

「AがBを叩く」と「AがBを愛する」では同じ他動詞文のように見えても違いがある。つまり他動詞にも働きかけの強いものから弱いものまであり、これは他動性や二項述語階層の問題として扱われている。感情述語は中でもっとも特徴的なもので、格をもつ言語ではその格枠組みもさまざまであり、与格主語構文や感情格構文(亀井・河野・千野編 1996: 244)を持つ言語もある。そもそもこの類の述語で受動表現が成立するか、能動文での格枠組みはどうか、受動文での格枠組みはどうか、などが注目される。日本語でも能動文の動作主が受動文で「～から」などをとって現れ得ることが知られている。

(コ) AはBに／から「…」と言われた。(伝達動詞の受身、特に動作主のマーカ―に注目)

(ク)と同様に、他動性の問題、格枠組みの問題がある。

次の(カ)(1), (2)は、研究ノート執筆向けの発展的課題としてとりあげたものである。

(カ)(1) AさんはBさんに呼ばれて、今Bさんの部屋に行っています。

(カ)(2) BさんがAさん呼んで、Aさんは今Bさんの部屋に行っています。

特に SOV 語順の言語では、このような複文中での同じ主語の維持のために受動をはじめとするヴォイスの諸形式が大きな機能を発揮していることが指摘されている。これはいわば指示転換 (Switch reference) の一種とみることもできよう。英語のように SVO 語順が固定した言語でも、語順が比較的自由的なロシア語などに比べて受動態の頻度が高いが、これは情報構造 (FSP) に応じて語順を動かすことができないため、受動を使わなければならないという背景がある。英語では重文において、後の文の主語を省略するためには主語を揃えなければならない、そのために受動が大きな役割を果たしているのである。

諸言語に見られる受動や使役における意味の広がりや移行を目の当たりにする時、受動や使役に(通言語的な)「固有の意味」を設定することの難しさを感じずにはおれない(これを設定する先行研究については次節で触れる)。想像をたくましくするならば、むしろ主語の維持などの、統語的な機能が先にあり、「迷惑」や「強制」、「許可」

といった話し手が感ずる具体的な「意味」は文脈や動詞の意味から確定・分化していった可能性も考えられる。モンゴル語のように使役と受動が未分化な言語の存在はその可能性を示唆しているように思われる。

3. 通言語的／類型論的にみた「受動」について

ここでは通言語的／類型論的な先行研究における記述を概観し、受動 (passive) とは何か、受動はどんな形式で表現されるか、受動が実現する意味は何か、受動の周辺にはどのような表現や現象があるか、受動の諸形式の歴史的な来源は何か、について若干の整理を行う。

3.1. 受動の定義について

Dixon and Aikhenvald(2000)は、項構造の変化 (changing valency) を起こすものを、まず項の増減によって valency reduction と valency increase に分け、それぞれの下位分類を行っている。passive は valency reduction の一つとされている。

valency reduction: (1) passive and anticausative, (2) antipassive, (3) reflexive and reciprocal, (4) 'middle'

valency increase: (1) causative, (2) applicative

受動 (passive) の定義に関して、もっとも典型的な受動 (passive) は次のような諸条件を満たすものであるとしている (一部省略)。

- (a) Passive applies to an underlying transitive clause and forms a derived intransitive.
- (b) The underlying O becomes S of the passive.
- (c) The underlying A argument goes into a peripheral function, being marked by a non-core case, adposition, etc.; this argument can be omitted, although there is always the option of including it.
- (d) There is some explicit formal marking of a passive construction — generally, by a verbal affix or by a periphrastic verbal construction (or by using a different kind of pronominal suffix).

このような分類および定義の問題点は、たとえば日本語の -(r)are に関して、間接受動ではむしろ項が増加してしまう、というような点である。「持ち主の受身」などでは目的語も残っているので、「自動詞」を派生したのかどうかも問題となる (そもそも

「派生」であるかも問題である)。つまり定義の(a)に抵触する。むしろこの定義を全て満たすものだけが受動であると述べているわけではないので、日本語の「受動」は周辺的な「受動」として位置づけられることになるのだろうが、やはり項の減少の操作(自動詞化)の一つとしてまず受動を位置づける点に抵抗が感じられる。インド・ヨーロッパ語族の諸言語での受動は、中動や動作主消去と深い関わりを持っているので、日本の研究者からみると、欧米で発達してきた言語学の伝統の影響を感じずにはいられない面がある。

次に Haspelmath(1990: 27)をみる。そこでは次のような構造を *passive* と呼ぶ、としている。

- (i) the active subject corresponds either to a non-obligatory oblique phrase or to nothing; and
- (ii) the active direct object (if any) corresponds to the subject of the passive; and
- (iii) the construction is somehow restricted vis-à-vis another unrestricted construction (the active), e.g. less frequent, functionally specialized, not fully productive.

ここでなぜ(iii)の基準が長々と述べられているのか、理解しがたいと感じる向きもあるろう。これはオーストロネシアの言語などで、形の上でも意味の上でも頻度の上でも、「無標」な「能動文」が存在せず、したがって受動文らしきものはっきり受動と確定できない状況があって、それに対応するために設けた基準といえることができる。先の Dixon and Aikhenvald(2000)より問題の少ない基準となっているように思われるが、(ii)のように能動文の目的語が主語になる、という基準には合わないものもある程度起こることになるだろう。

さらに、Haspelmath(1990:26-27)が、「受動はアスペクトやテンス同様、動詞のカテゴリーであって、何らかの方法によって形態的に表示されるものである。一般に受動の形態論を持たない受動構造は存在しない。(適宜要約)」と述べている点も注目に値する。Keenan and Dryer(2007)も述語もしくは動詞句における明示的な受動の形式の存在を問題にしている。topicalization や left/right-dislocation を受動とは呼べないのは、こうした形態面での支えがないからであるとみている。

この他に、一部の言語でしか通用しないかもしれないが、「影響」など意味の面から受動を定義することも考えられる。そこでは今度は「影響」とは何かの定義が必要になってくるだろう。そこでは特に「受動」を意味するものが「受動形式」であるというような循環論に陥らないようにしなければならないだろう。Haspelmath(1990)はこう

した危険性も指摘した上で、受動の本質として「動作性の減少」(inactivization)をあげている。同じく受動文を意味や語用論的(談話的)機能の側から定義しようとしたものとして Shibatani(1985)や Shibatani(2006)があげられる。

Keenan and Dryer(2007)は、基本的な受動(Basic passives)と、そこから逸脱した受動(Non-basic passives), という形で「受動」の本質を探ろうとしている。Non-basic passivesとしてあげられているものは、(i)動作主を示す句を伴った受動(Passives with agent phrases), (ii)非他動詞からの受動(Passives on non-transitive verbs), (iii)複他動詞からの受動(Passives on ditransitive verb phrases), (iv)被動者以外の主語を伴った受動(Other passives with non-patient subjects), の4つである。

Keenan and Dryer(2007)は、通言語的に有効であるとする下記の受動に関する一般化(Generalization)を提案している。むろん、言語普遍的な一般化は、一つの言語でも例外があれば成立しないわけであり、今後の検討が必要なことは間違いないが、ここにとりあげることにする。

G-1: ある言語には受動が全く欠けていることがある。

G-2: もしある言語が何らかの受動を持っている場合、それは上記の基本的な受動(Basic passives)であって、さらにそれのみを持っている可能性がある。

G-2.1: もしある言語が動作主を示す句を伴った受動を持っていれば、伴わない受動も持つ。

G-2.2: もしある言語が状態動詞の受動を持っていれば、出来事を示す受動を持つ。

G-2.3: もしある言語が自動詞からの受動を持っていれば、他動詞からの受動も持つ。

G-3: 基本的な受動を有する言語はふつう形態的に異なる2つ以上の受動を持つ。

G-4: もしある言語が何らかの受動を有していれば、それは完了アスペクトの意味範囲をカバーするのに用いられ得る。

G-5: もしある言語が2つもしくはそれ以上の受動を有するならば、それらはカバーするアスペクトの範囲に関して意味的に異なっている。

G-6: 受動の動詞句の主語は、それが他動詞の目的語として表現される場合、動作の影響を受けるものとして理解される。

G-7: ある言語における異なったいくつかの受動は、主語の被る影響(affectedness)の度合いに応じて異なっている。それが肯定的な影響であろうと否定的な影響であろうと、その変異の広がりにはアスペクトによる広がりよりは狭い。

3.2. 受動がとる形態について

Haspelmath(1990)は、地域的形態的に偏りのない 80 の言語について調査し、それらの言語における受動の表現形態は次のようであったと報告している (80 のうち、31 の言語のみに受動が存在し、いくつかの言語では 2 つ以上の受動形が存在したため合計は 38 となっている)。

(1) additional stem affix	25
(2) auxiliary verb (+participle)	6
(3) particle	1
(4) extrainflexional affix	3
(5) differential subject person markers	2
(6) alternate stem suffix	1

(1)は日本語のようなタイプ、(2)は英語のようなもの他にさらに中国語のような孤立語タイプのものを含む。その他はみなマイナーなタイプであるが、(3)にはマルギ語 (アフロ・アジア語族)、(4)にはデンマーク語、(5)にはラテン語、(6)にはケファ語 (アフロ・アジア語族) の例があがっている。

Haspelmath(1990: 25)では、「受動は早くから統語論の分野において重要な役割を演じたため、特に 1957 年以降の言語研究において受動の形態論的な面は軽視されてきたが、80 年代の形態論への関心の復活と共に、統語論の研究にとっても不可欠な問題となってきた (適宜要約)」と述べている。

このような記述を読む限りでは、受動 (的な意味) を諸言語においていかなる形態や表現法によって示すか、その相互の関連はどのようになっているか、といった問題についてはまだまだ研究が不十分であることが窺われる。

3.3. 受動が実現する意味、受動の周辺に位置する意味について

Haspelmath(1990)は、受動の形式が実現する意味はしばしば受動に限られていない、とし、以下のような意味・機能を例証している。なお氏の 80 言語による調査では 25 の形式にさらに他の文法機能が観察されたという。

再帰 (Reflexive)、相互 (Reciprocal)、衆動 (Collective)、結果相 (Resultative)、逆使役 (Anticausative/Mediopassive/Inchoative、動作主が消失し他動詞の目的語が主語に昇格するもので、日本語文法における自動詞化に近いといえよう)、可能 (Potential passive)、状態開始 (Fientive/Inchoative、「なる」化)、再帰使役 (Reflexive-causative)、目的語不定化

(Deobjective), 主語不定化 (Desubjective).

Keenan and Dryer(2007)は、「受動に似た構造」として、中動 (Middles) , 主語不特定の構造 (Unspecified subject constructions) , 反転 (Inverses) , 逆受動 (Antipassives) , の4つをあげている。

今回のアンケートでは、このような「受動」形式が実現する意味、さらには受動と連続する（もしくは逆に範列的（連合的）な関係にあつて受動と対立する）他のヴォイスの形式／意味、に関する質問を用意した。

3.4. 受動への通時的な文法化

Haspelmath(1990: 54)では、さらにさまざまな源から文法化が起こり最終的にそれが受動（さらには能格構造）に集約してゆく下記のような図式（図 1）を考えている。これは Bybee のいう一方向仮説に基づいたもので、文法化は左から右の方向へ向かって一方向的に進む、とするものである。来源には図にみるように大きく4つのものがあるが、これらは右に行くにしたがつてそれぞれの特性を弱め、次第に受動という共通の意味機能へと収束していくのであるという。またこれは意味の面を図式化したもので、同時に形態の面でも語>付属語>接辞、のような文法化がすすむものと考えている。

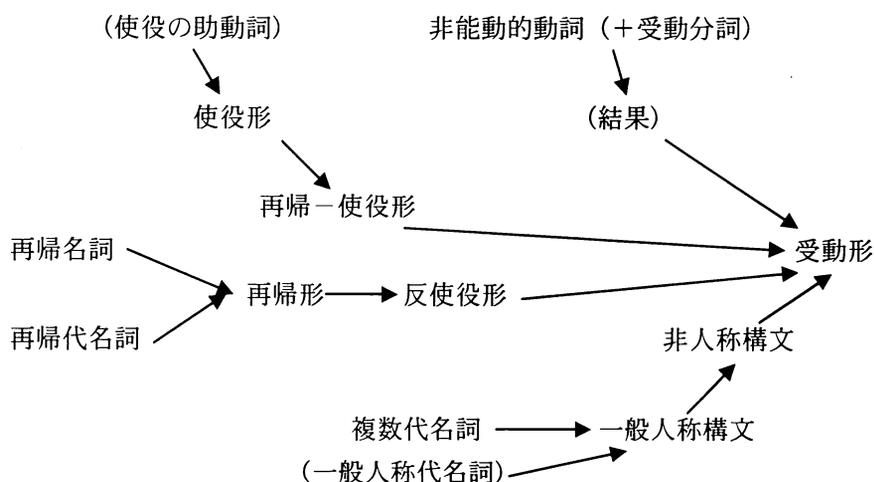


図 1: 受動形態素の諸来源ならびにその収束
(Sources of passive morphemes and their convergence)

Keenan and Dryer(2007)は、形態的な手法の面から受動を「厳密に形態的な受動」(Strict morphological passives, つまりは接辞によるもの)と「迂言的な受動」(Periphrastic passives, 助動詞を使うもの)に分けた上で、迂言的な受動を構成する助動詞の意味分野を示している。つまりこれは文法化して助動詞となった語の来源を示しているということでもある。その意味分野は、(i) a verb of being or becoming, (ii) a verb of reception (e.g. get, receive or even eat), (iii) a verb of motion (e.g. go, come), (iv) a verb of experiencing (e.g. suffer, touch, even 'experience pleasantly') の4つである。4つめのグループに関して、Keenan and Dryer(2007: 338-339)が次のように述べている点が注目される。すなわち、「この種の受動は漢語を含む東南アジアの諸言語に広くみられる。しかしその受動としての分析は明らかなものとはいえない。これらの言語は拘束形態素を持たない。そして受動の助動詞は単純な文の主動詞として起こるために、これらの言語における受動は動詞連続構造 (serial-verb construction) の特殊なケースと分析することが十分に考えられる」としている (一部改変ならびに省略)。

4. 本特集で収集した言語とその受動

本特集でデータを収集した言語を語族別に見ると、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語、ポーランド語、チェコ語、ペルシア語、ウルドゥー語はインド・ヨーロッパ語族の言語、ベトナム語、カンボジア語はオーストロ・アジア語族、インドネシア語、マレーシア語はオーストロネシア語族、中国語はシナ・チベット語族、モンゴル語、ツングース諸語は立証されたものではないがいわゆるアルタイ諸言語、それに系統不明の古代日本語、ということになる。

以下では各言語のデータに対して、筆者が興味深いと思った点や、注意すべきであると思った点について簡単に触れる。もとより筆者の浅い理解による独断であるので、一つの目安もしくは一つの見方と考えていただければ幸いである。繰り返しになるが、今回は十分に対照言語学的もしくは類型論的な考察を行う余裕 (および力量) がなかった。読者をかえって惑わしたり、間違った概観を与えはしまいかと懸念される。データ自体 (および各執筆による分析、記述) を御自身で検討されることをお勧めする。

まずインド・ヨーロッパ語族の諸言語に関しては、やはり中動的性格が強く感じられる。ギリシア、ラテンなどの古典語では中動態と受動態はきわめて近い関係にあり、

屈折形態によって示されていた。現代語ではより分析的になってはいるものの、やはり再帰代名詞もしくは再帰代名詞起源の形式による表現が大きな部分を占めているようだ。したがって能動文の動作者は現れないのがふつうであり、むしろそれが不定である状況において大きな力を発揮する。再帰代名詞による表現はイタロ語派の言語(ロマンス諸語)でもっとも発達しているようだ。スラブ系では3人称に限定され、ロシア語ではさらに動詞の一部に融合してしまっている。

インド・ヨーロッパ語族の言語において、動作主不定以外の状況では、能動文がかなり優勢であるようだ。特に語順の自由なロシア語などの言語では、それが大きな助けとなって、能動文で受動的意味の多くの表現を済ませているように見える。語順にもう少し制限のあるドイツ語などでも、文頭の位置に与格の名詞を持ってくことなども補助的に利用している。普通名詞に格を持たないイタリア語でも、1人称代名詞などではやはり同様の表現が見られる。

能動文で処理するもう一つの方法は3人称複数主語を用いて不特定性を表現する方法である(ただしイタリア語では3人称単数が用いられるようだ)。これは遠くペルシャ語などでも同様のようだ。ドイツ語やフランス語など、主語が基本的に必須の言語では「人」を示す名詞などが現れるものの、基本的な考え方は同じであるといえよう。ドイツ語では主語無しの文がしばしば成立している点が興味深かった。イタリア語では「来る」、ポーランド語では「おく」などの動詞が使用される点も注意すべきであろう。

頻度に関しては、今回の調査でははっきりしたことは言えないのだが、やはり能動文優勢の傾向が感じられる(ただし先に述べたように、今回の調査では、日本語の受動に対応しない他言語の受動の方には目が行き届いていない)。この点で英語という言語は、むしろヨーロッパの他の言語からみると例外的存在なのではないかと感じた。すでに指摘されていることかもしれないが、確かめてみたいと思う。

Keenan and Dryer(2007)の一般化の中には、アスペクトの違いによる受動の分化があげられていたが、スペイン語やロシア語ではやはりアスペクトに関する言及があった。特にスペイン語ではアスペクトの違いに関連してコピュラも2種類存在するために、アスペクトと受動の使い分けに大きな関連性が見られた。ロシア語などにおいて、形動詞による受動表現はきわめて文語的になる点なども、注意が必要であろう。

インド・ヨーロッパ語族の言語でも、もっとも東に位置するウルドゥー語ともなると、上記の言語とは大きな違いが現れてくる。与格主語による感情述語の表現や、過

去時制における能格・絶対格構造の文などである。これら自体は受動表現とはいえないが、受身的意味の一つの表現として、大きな役割を果たしているのは間違いがないだろう。

インド・ヨーロッパ語族の言語以外は、みな東アジア（東北アジアと東南アジア）の言語であるが、こちらの言語になると、多かれ少なかれ「迷惑」もしくは「影響」といったことが必ず受動成立の重要な条件となっていることが注目される。なんらかの「結果状態」を必要とする中国語のような言語もあるが（被不利益ではベトナム語も）、これは「影響」ということと強い関連があるだろう。ベトナム語においては「受益」と「被不利益」に分化している点も興味深い。

東アジアの言語にあって、まずベトナム語、クメール語、中国語の三者は、まず典型的に孤立型である点で際立っている。これらの言語での受動表現は、やはり動詞連続構造（serial verb construction）の一種であるという側面を強く示しているように思われる。

クメール語やビルマ語では、植民地支配の宗主国の言語などの影響から、受動がよりさかんに用いられるようになったという記述がある。ビルマ語のように文語と口語の差の大きい言語においては、受動が文語的な表現として存在しているのかどうかという問題も特に注意する必要がある。

インドネシア語およびマレーシア語の属するオーストロネシア語族の諸言語は、受動をはじめとするヴォイスの研究に大きな影響を与え続けてきた。今回の調査でもっとも興味深い特徴を示している。インドネシア語およびマレーシア語は、特に語根レベルで名詞と動詞の区別もあまり明確でないにも関わらず、名詞の格変化も無い。したがってこの言語の文の構造は主に動詞の接頭辞（および接尾辞）によって決定されている面が大きい（いわば Head marking な言語である）。受動的な要素も、項の減少に関わる接頭辞（di-）と、項の増加に関わる接周辞（ke- -an）に分かれる。意志性や結果性の違いから、さらに ter-などの要素も存在する。

しかもそもそもこれらの要素を受動とみるかについての問題がある。フィリピンの言語などでもよく問題になるが、問題の諸形式の機能を、FOCUS 的な（つまり情報構造的な）ものとみるか、名詞化とみるか、もしくはヴォイスをはじめとする統語的な対立とみるか、という問題が大きく立ちはだかっている。

「持ち主の受身」タイプの文などで問題になるが、所有を示す接辞 -nya の存在も見逃せない。所有構造とヴォイスの相互関係は、今後通言語的にさらに研究していく必要があるだろう。

橋本萬太郎(1989)によれば、現代中国語は北方のアルタイ的要素を大きく取り入れた漢語である、とのことだが、たしかに中国語は先にみた孤立型の類型的性格から南の言語との類似を見せると同時に、北のモンゴル語との類似点もあるように思える。それは使役と受動が同一の形式で示される点である。この点を共有する言語には、さらにツングース諸語のうちの満洲語やナーナイ語が加わる。

モンゴル語では、意外に主語の無い文が多く成立することが興味深かった。今回調査した受動的意味に対して、モンゴル語は使役、自発、衆動、アスペクト形式、などの諸形式をうまく用いて表現している点が興味深い。

ツングース諸語は、同じ語族の言語でありながら、語族内の各言語が受動に関してきわめて多様な違いを見せる点が興味深い。まずエウエン語は自動詞からの受動ができるなど、日本語並みに広い範囲をカバーする受身（被影響の構造: adversative construction）を持つ。ウデヘ語やナーナイ語には逆に受動形式が無く、もっぱら非人称の形式を用いて受動的意味を表現する。満洲語では使役と受動が未分化である。

古代日本語では、格枠組みその他の点で、現代日本語とさまざまに異なっていることが興味深い。自動詞の受身も直接の不利益・影響のものに限られるという。この点はスペイン語の記述で指摘されていた事実と合わせて読むとさらに興味深い。

以上雑駁な感想のようになっているが、何らかの参考になれば幸いである。なお本稿執筆に際して、成田、川村両先生より貴重なコメントをいただいた。ここに記してお礼申し述べたい。ただし本稿における誤謬等は全て筆者の責任に帰するものである。

参考文献

- Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald 2000. "Introduction." R. M. W. Dixon and A. Y. Aikhenvald eds, *Changing Valency: Case Studies in Transitivity*. pp.1-29. Cambridge University Press, Cambridge.
- Haspelmath, Martin 1990. "The Grammaticalization of Passive Morphology." *Studies in Language*, 14-1, pp.25-72.
- Keenan, Edward L. and Matthew S. Dryer 2007. "Passive in the world's languages." T. Shopen ed., *Language Typology and Syntactic Description, Second edition*, vol. 1: Clause Structure, pp.325-361. Cambridge University Press, Cambridge.

Shibatani, Masayoshi 1985. "Passives and Related Constructions: a prototype analysis."
Language, 61-4, pp.821-848.

Shibatani, Masayoshi 2006. "On the Conceptual Framework for Voice Phenomena."
Linguistics, 44-2, pp.217-269.

亀井孝・河野六郎・千野栄一編 1996. 『言語学大辞典 第6巻 術語編』, 東京:三省堂.

橋本萬太郎 1989. 「中国語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編, 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編』, pp.892-906, 東京:三省堂.

付録:アンケート

語研論集特集へのご協力をお願い

風間伸次郎, 川村大, 成田節

語研論集の特集について、10月末にメールでお知らせしましたが、このほど、風間、川村、成田の三者で相談し、以下のような大枠で「受動表現」に関する原稿作成あるいは言語データ提供を改めてお願いすることになりました。

特集の趣旨は、自由な（したがって通常は相互に関連のない）投稿原稿ばかりではなく、「語研論集ならではの」というコンテンツを考えてみようということです。特集の個々の寄稿は論文でも研究ノートでも結構です。また、論文・研究ノートを書く余裕がないという場合には、下のようなアンケートに答える形で言語データ提供にご協力いただければと思います。共通のテーマに関して、さまざまな言語における状況をまずは並べて見てみることから始めたいと考えています。

I. 以下のアンケートにご協力ください。

日本語では広く受身文が用いられ、例えば次のような事柄を受身文で表すことができる。このような事柄はその言語でどのように表現する（表現できる）か？

- (イ) A は B に足を踏まれた (持ち主の受身, 体の部分)
- (ウ) A は B に財布を盗まれた (持ち主の受身, 持ち物)
- (エ) 昨日の夜, 私は赤ん坊に泣かれた. それでちっとも眠れなかった (自動詞からの間接受身)
- (オ) 新しいビルが (A によって) 建てられた. (モノ主語受身, 一次的)
- (カ) カナダではフランス語がはなされている. (モノ主語受身, 恒常的. 動作主が問題にならない場合)
- (キ) 財布が (A に) 盗まれた (モノ主語受身, モノ主語の背後に被影響者が想定される)
- (ク) 壁に絵が掛けられている (モノ主語受身, 結果状態の叙述)
- (ケ) A は B に / から愛されている. (感情述語の受身, 特に動作主のマーカーに注目)
- (コ) A は B に / から 「...」 と言われた. (伝達動詞の受身, 特に動作主のマーカーに注目)

(なお A, B などには自由に翻訳しやすい名詞を使ってください)

- * 翻訳された結果出てくる文は, いわゆる受動文でなくてかまいません.
- * これらの意味内容を能動文で表すという場合には, その能動文を教えてください. これらのタイプの事柄を表すのに受動文もしくはそれに類する表現自体が使われない, ということが重要な情報になります.

それから, たとえば英語であれば,

Somebody has stolen my watch. 私は時計を盗まれた

I have had my watch stolen. 私は時計を盗まれた

They killed my brother on me. 私は兄を殺された

They speak French in Canada. カナダではフランス語が話されている

のような, いわゆる「受動文」以外の文でも結構です. 何らかの方法で上記のような文のニュアンスを表現する方法がその言語にあれば, それを教えてください.

II. 論文・研究ノートをご執筆いただける場合は次の2点を可能な限りご考慮ください.

1. いわゆる「受け身的なことがら」を表すにはどのような (形態的, 構文的, 語彙的など) 表現があり, それはどのように (形態的, 構文的, 語彙的, 意味的に) 規

定しうるか？特に構文について、受動文で、元の文の動作主は現れるか現れないか。現れる場合、どのように（格標示、前置詞句、接辞、語順変更など）で表されうるか？

2. 「受動文」に関して、その言語で定説とされているのはどのようなことか？代表的な先行研究にどのようなものがあるか？その内容は大筋どのようなことか？

さらに以下の点（の内のいくつか）も考慮に入れていただけるとありがたいです。
これらの問題設定についてはそれぞれの言語の事情に応じて柔軟にお考えください。

3. 使役の意味にも受動の意味にも用いられる構文があるか？
4. もし受動や使役を表す要素がもともと独立した語（動詞など）であった場合には、独立語のときの意味は何か？
5. 形態論的なカテゴリーとしての「能動-受動」対立があるか？また、「能動」「受動」と並びうる形態（あるいは構文）があるか？あるとしたらそれはどのようなものか（使役、再帰、中動など。たとえば日本語では「見る」（能動）、「見られる」（受動）と並んで「見させる」（使役）がある、など。）
6. 実際の言語運用で「受動文」はどのように用いられているか。「受動文」の用いどころ。
7. 言語教育で「受動文」を扱う際に、特に問題となりそうなポイントとして何があるか。
8. 受動文は「迷惑」などある種の意味に限られているか？それともそんなことはないか？
9. 受動文と同じ構文、あるいは受動文述語と同形の述語には、「受身的な事柄」の表現以外の用法があるか。あるとすれば、どのような場合に用いるか。（たとえば日本語では、「動詞+ラレル」形の述語を自発・可能・尊敬などの表現にも用いる。ただし格体制は受動文の場合と異なる）
10. つぎのような意味内容を表す場合、どのような表現になるか？また受動表現は用いられるか？
 - (ア) AさんはBさんに呼ばれて、今Bさんの部屋に行っています。
 - (イ) BさんがAさんを呼んで、Aさんは今Bさんの部屋に行っています。